

この頃の番茶は、昔ほど強くは、におわなくなった。昔は、中華そばの胡椒のにおいも強烈だった。この頃は、それほどでもない。大きくなって鈍くなったのかなあ。

六時頃からもう寝てしまった。

僕は、再び、夢を見ていた。

ガシガン照る太陽をにらみながら、僕は汗をふいていた。八幡町の河原へ水泳に来ていた時のことだ。

まだ小学校入る前の、幼い僕だった。水泳客でにぎわう河原で、僕は、かき水を求めて、長い列を待っていた。

すると、土手を駆け降りて来る女の子がいた。

まっすぐに僕の方に向かって来る様子で、勢い余って、僕にぶつかりそうだった。

僕はとっさに両手を前に出して、その子を受け止めようとした。しかし、その女の子は、僕の目の前、ぎりぎり立ち止まった。

僕はじっとその子を見ていたが、

その子は、僕には注意を向けず、次の瞬間には、もう、そのかき水の店の中の人に向かって、気安く話しかけていた。

話が終わると、見ている僕の方を振り向いて、

一瞬、ニッコとして、そのまま川の方へ走って行った。暑い熱風が、その子のスカートをなびかせていた。

僕は、その子が、水泳客の中に、小さくなり消えるまで目で追った。

大きくなって鈍くなったのかなあ